

# 教 仏 名 聞

第42号  
(発行日)

2014年3月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488

(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/^souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始。  
○ 〈念仏座談会〉  
毎月2日と12日午後3時始  
○ 〈聖典学習会〉  
毎月6日午後7時始。  
○ 〈真宗入門講座〉  
毎月18日午後6時30分始。  
\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## いのちが私を生きている

真宗は親鸞聖人を宗祖しゅうそとお  
おぎ、阿弥陀仏の本願に帰し  
て念仏を申し、全ての人々と  
共に救われるべく、浄土に生  
まれ往く道に生きる教えで  
す。

近年、真宗大谷派ご本山（  
東本願寺）では宗祖親鸞聖人  
の七百五十回忌が勤ごんしゅう修しゅうされ  
ました。七百五十回忌を縁と  
して作成された真宗大谷派教  
団のテーマが

「今、いのちがあなたを生き  
ている」  
という言葉です。

「今、いのちがあなたを生  
きている」と云う言葉につい  
てはいろいろ話題になりまし  
たが、現代の状況において、  
この言葉は非常に深い意味を  
もっていると思います。

そこで、この言葉が何を言  
おうとしていることを考えて  
みたいと思います。

まず私たちは普通「私が私  
のいのちを生きている」ある  
いは「私は七十年なり八十年

なりの私の寿命を生きるの  
だ」と思っています。

そして八十年なりの寿命の  
内容をどのように（盛りつけ  
る）かが人間の生き甲斐がいであ  
り人生の目的だと思っ  
ていないでしょうか。

知識や技術を身に付ける。  
才能を伸ばす。財産を作る。  
事業を発展させる。子供を育  
てる。趣味や道楽を充分に楽  
しむ。人格を高めていく等、

ただ生きているのは無意味で  
あって、私のいのちの内容を  
如何に価値あるものにしてゆ  
くことこそが大事なことだと  
思われています。

そしてどれほど人生の内容  
を豊かにしても「いのちあつ  
ての物種ものたね」というこ  
の肉体としてのいのち（寿命）  
をこそ第一に考え、健康で長  
生きをしたいと思っ  
ています。

しかし、こういう人生観の  
本にあるのは、八十年なりの  
いのちは（私のもの）であり、

いのちを  
管理し、  
いのちを

支配し、  
いのちを  
操あやつるの

は（私）  
であると

心の底で思っているのではな  
いでしょうか。いわば「いの  
ちは誰のものか」と自らに問  
うならば「それは私のもの」  
という答えが返ってくるので  
はないでしょうか。

そしてその場合の「いのち」  
はどこまでも「私の肉体とし  
てのいのち」の外にはないと  
思っているといえましょう。  
それゆえ死んだら何も無く  
なり、何もできなくなり、も  
はや何も楽しむことはできな  
くなるので、できるだけ死な  
ないようにし、安全を確保し  
て、生きのびよう  
とします。

こうして「死ぬのは仕方が  
ないので、死ぬまで大いに有  
意義に生きよう、楽しもう」、

## 《 念佛寺永代経法要 》

四月二十二日（火）

午後二時始

講師 藤本千穂美師

\*同日（四月二十二日）午前十時・勤行

（念佛寺住職の法話です）

それが私たちのばくぜんとし  
た人生観になっ  
ているのでは  
ない  
でしょうか。

しかしながら、どんなに死  
に対して予防し、死への対策  
を講こうじても人は死をまぬがれ  
ません。死ねば自分の貯たくわえ  
た財産は他の物となり、持て  
る才能も技術も役に立たず、  
どんな楽しみもはや楽しめ  
ません。それらは、無に帰し  
てしまいます。

しかも肉体のいのちが老化  
し死へと急ぐいのちですか  
ら、人生の基本的な色調はグ  
レーであり、憂ゆう愁しゅうが人生生  
活の本に漂ただよっています。

こうした憂ゆう愁しゅうなり悲哀ひあいと  
いう形で現れてきている憂苦

は、その本に、肉体的ないのち)を(私のもの)あるいは(私自身)の如くに思いこんで、それに執着している、いわば私(自我)がいのちの主体、支配者のように思っているから憂苦を免れないのだと仏教では指摘しています。

そして仏の教えの結論から言えば、事實は、「私が私のものであるいのちを生きている」のではなく、「いのちの方が私の基盤として生きている」「いのちに於て私が生きている」「いわば「いのち」の方が本である、それが真実なのであり、それを見失っているところに人生の根本問題がある、と仏教では説いています。

では「(いのち)の方が私の基盤としてあり、その上に生きている」といわれるその(いのち)とは、どういう「いのち」でありましょうか。それは生まれて老いて病いとなり死んでいく(肉体的な

いのち)ではなくて、その肉体的いのちに離れず、肉体的ないのちがその(いのち)によつてあり、肉体的ないのちとして現れている「まことのいのち」であります。

その「まことのいのち」は「目に見えない」のであり、しかも無量な働きです。その無量ないのち(無量寿如来)、それが(まことのいのち)であります。

そして、無量ないのちが今ここに限定されてあるのが今ここに存在している肉体としてのいのちでありましょう。それは、肉体のいのちをしていのちたらしめ、肉体のいのちを貫いて、今ここに働きのうちに働いている限りないいのちのはたらきであります。まさに肉体的ないのちの根源のないのちであり、人の真実主体であるべきいのちとして働きづめに働いているのです。

ここがなかなか分かりづらい点なのですが、ある賢者が譬喩でやさしく教えて下さっています。それは(からだのいのちと量りなきいのちの関係は、ちょうど雲と大空の大气のようなもの

である。

雲は大气の中にあり、大气において生じ、大气を離れては存在し得ない。

雲は私たちの有限ないのちにたとえられ、大空の大气は無量ないのちにたとえられる。

たとえられています。このたとえのように、目に見えない広大な空の大气を(まことのいのち)にたとえ、そこから生じた雲を私たちの

(肉体的ないのち)にたとえています。そして私たちは雲のいのちしか知りません。

しかし、雲をして雲の存在を可能ならしめるのは大气であるように、その大气のいのちを離れては私たちの雲の如

きいのちも存在し得ません。しかるに私たちは雲のいのちしか知らず、それに妄執し、それにしがみついています。

しかも私という雲と他者の雲とを比較し、大きさや色や形のような持ち物(才能、財産、社会的地位、学歴など)を競い合つて煩つています。

青空の大气のような明るいいのちを私は長い間知らなかったのです。それを見失っていたのです。「今いのちが私

を生きている」という「いのち」は、このような寿命無量(アマダ)としての明るいいのちです。

そういう私たちに、量りなきいのち自身(アマダ)が、名号(南無阿弥陀仏)として、私たちに現れ、私たちに喚びかけ、私に「ここにいます」「助ける」「お前を引き受ける」

「お前の主であるぞ」と喚びかけ、知らせて下さるみ言葉、それがお念仏の声であり、南無阿弥陀仏の名号です。

量りなきいのちには、量りない智慧と慈悲の徳があり、一切の生きとし生けるもの

苦を除き真実の樂を与え、仏にしたやりたいという大悲の智慧が名号となつて私たちに働きかけて下さっていること

を、この上ない悟りを開かれた仏陀釈尊は告げ知らせて下さっています。

この仏陀のお言葉(經典)によつて私たちは量りない大悲の働きを、聞くことができ、知ることができ、信じていること

のできるのです。

このような阿弥陀仏(無量寿仏)の御名を聞く時、私たちは「今いのちが私を生きている」ということがほのかに知らされます。この感知は私たちの喜びであり安らぎとなります。

私たちが摂め取りたもうこのいのちは不死であり、慈悲であり、智慧であり、充実であると、有難くお聞かせいただきます。

こうして「今いのちがあなたを生きている」という言葉が実感となつて「今いのちが私を生きている」という喜び

にならしめたもうのがお念仏であります。

お念仏は、生まれて死ぬる身を越えしめ、自分と他者を比較する価値意識(コンプレックス)を越えしめる(普遍的ないのち)に、であわせて下さる法なのであります。

(了)

《春季彼岸会法要》  
三月二十二日(土) 午後二時始

# 正信偈に学ぶ同答

(六十一)

弘経大士宗師等

拯済無辺極濁悪

道俗時衆同心

唯可信斯高僧説

(書き下し) 弘経の大士・宗師等、無辺の極濁悪を拯済したまう。道俗時衆、共に同心に、ただこの高僧の説を信ぜべし、と。

(現代語訳) 浄土の教えを広めてくださった祖師方は、数限りない五濁の世の衆生をみなお導きになる。出家のものも在家のものも今の世の人々はみなともに、ただこの高僧方の教えを仰いで信じるがよい。

\*

N 「へ弘経の大士」の弘経というのは、經典に説かれた浄土の教えをひろめたもうことですね。ではへ大士・宗師等とは」

D 「この大士とは菩薩のことで、正信偈では龍樹菩薩と天親菩薩のことであり、次の

宗師とは曇鸞・道綽・善導

・源信・法然の五人の高僧方のことです。ですからへ大士宗師等」とは七高僧のことです」

N 「極濁悪とは」

D 「衆生のことで、阿弥陀佛から見られている私たち衆生は、煩惱の固まりの様な極めて濁った心をもった存在であると告げられています。それがまた私のすがたであります。限りなき清浄真実の仏心大悲に照らし出された衆生は、我執我愛で濁りきっている存在であると申されるのでありましょう」

N 「へ汝は煩惱に濁りきっている存在なのだ」と何度も何度もお知らせをいただくのですね。何度も聞き続けなければ、いつの間にかへ私は煩惱の少ない善人であるところと直ぐ腰を下ろしてしまします。愚かな者です」

D 「極濁悪の身であると徹底して私たちの心の底の底まで知り抜いて下さって、そんな

私たちを助けよう、仏にしようとして立ち上がって下さった如来法蔵様なのです。聖人はへそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

と仰せになつています」

N 「へ無辺の極濁悪を拯済したまう」とは」

D 「七高僧は、阿弥陀仏がどこどこまでもよりそつて数限りない極悪の衆生をへ拯済したまう」ことを私たちに知らせ、私たちを救いに導いて下さる、と聖人は仰せになるのです。七高僧は阿弥陀仏のお心を私たちに知らせんが為に現れて下さった化身のように聖人は感じておられるのでありましょう」

N 「へ道俗時衆」とは」

「道俗とは、道は出家を表し、俗は俗人いわば在家を表します。時衆は今の時の衆生という意味で、現代に生きる人々ということですね。へ道俗時衆よ」と喚びかけておられるのです」

N 「そうすると道俗時衆とは今に生きる全ての人々よ、という意味ですね」

D 「ええそうです。弥陀の本願の前には、出家とか在家とかの区別も差別もありません。本願の仏教においては、出家であるとか在家であるとかの差異をまったく超えているのです。ただへ生けるものである」というだけで弥陀の本願の救いの対象であります。そういう意味では弥陀の本願から見ると全ての衆生は平等です。ただし煩惱具足の凡夫であるという平等です」

N 「へ共に同心に、ただこの高僧の説を信ぜべし」とは」

D 「今に生きる一切の人々よ、この七高僧の説き表して下さった阿弥陀仏の本願念仏を、共に心を阿弥陀仏の本願に同じく寄せて、唯だ弥陀の本願をこそ信ずべきである、そしてそれが人生のもっとも肝要なことなのです、と現代の私たちに聖人はお勧め下さるのです」

N 「七高僧の説というのも弥陀の本願のほかには無いのですね」

D 「ええ、釈尊が浄土の經典、ことに仏説無量寿経に弥陀の本願をお説き下さいました。そして無量寿経の核心が弥陀の本願であり、それは一切衆生を平等に自利利他円満の仏に成さしめたもう大悲の真実

であつて、それは本願の念仏となつて私たちの上に届いています。それを聞きそれを信じる信心一つで、仏になるべき身と定まるという不可思議な誓願の仏法であること、そのことを私たちの上に明らかにして下さった方々が七高僧であり、親鸞聖人です。本願を最初に説かれた釈尊、そして七高僧、親鸞聖人と、一河の流れの様に弥陀の本願は流れてきて今、私の上に南無阿弥陀仏の声となつてお知らせ下さいます」

N 「親鸞聖人を含む弘経の大士宗師等がへ汝、仏説である弥陀の本願を唯だ信ぜよ、ここに汝の救いが既に与えられているのではないか、外のどこに汝は助かる道を探そうとしているのか」とお勧め下さっているように私には感じられます」

D 「ええそうですね。へ高僧の説を唯信ぜべし」とは唯だ本願念仏を信ぜべしということですね。正信偈はへ無量寿如来の仰せ、すなわち本願の仰せに帰命せよ」で初まり、最後に唯だ高僧の説である弥陀の本願を信ぜよで終わっているのです」

(了)

# 木村無相さんの法信 ⑬

(昭和五十八年七月二十三日の木村無相さんから私へのお手紙)

和上苑の二階の自室にて、仰臥しつつ無相

②さて、紀さんの七月十六日消印の法信の、法信部分を全部書きます。

私にはこれで信じたというものは何もありません。むしろ信ずる心なきものにこそナムアミダブツと浸み入って下さるお心が(ほのかなほのかな光となって)時々嬉しく感ぜられます。

ここまですべてについて今日のミニレターの①に大体書きました。さてこの②はこれからアトのことについて書かせてもらいたいです。

しかし大抵は、何ともない心です。又、何ともない心を何とかしようとも思いません。何ともない心のままに、歩かせてもらってあります。ナムアミダブツナムアミダブツと。合掌

これでおしまいになっているのです。

まことに、短く簡単ですが、ここが大切なところでもあります。

○

私がこの「何ともない」という言葉に、はじめて合ったのは、もう四十年前も前か、三十七、八才のころのことです。(今の紀さんのころか、私はおそくて、三十二才からはじめて真宗の寺にいつて、真宗の御縁にあいだしたのです。紀さんの今の三十八才ごろは松原先生の寺を出た当時で、念仏は申していたが、ナニもわからない

のでした。)

○

さて、私が「何ともない」という言葉に、はじめて合ったのは今から四十年前の三十八、九のころでして、丁度、今の紀さんのトシゴロでしたが、それから二十年も、それがナニを意味するか、わからなかったのです。

○

それは『庄松ありのままの記』に庄松同行の言葉として二度のついているのです。一番はじめは、(今、チョット『ありのまま記』が見つからるので『信者めぐり』によつて書きます。)

○

『信者めぐり』<sup>1</sup> 9頁に、次の如くあります。

庄松同行の厚信なることを聞き、江州(滋賀県)長浜の同行、カゴを以て請待した。

其の晩の勤行には「帰命無量寿如来」で始まりて「往生安楽国」で終わるかと思ふたら(庄松が導師)鐘を打ち「ナントモナイナントモナイ」というだけで終わった。多くの参詣人は皆驚いたとある。

又、如何なるウマイ話があるかと思ひ、今か今かと待ちうけて居たが、一言の御法話もない。ただジツト座つて居るだけ。

皆アテがはづれてアクビまじりに念仏称えながら、不足や小言を云い帰つたところ。そのアトで、宿の主人が庄松に不足を云うた。

『アンタもあんまりじゃないか。この遠方まで来ていただいたのは、ありがたい話を聞かせてもらいたいたためである。それに一言もないということがあるもんか』庄松曰く

『何を言う。今晚はありがたい話があつ

たじゃないか』

主人曰く

『ナニありがたい話があるものか、一言もなかったじゃないか』と重ねて不足を言うた。

庄松曰く

『私は又、非常にありがたい話が聞こえた。アチラにも、ああナムアミダブツ、コチラにもナムアミダブツ、実にありがたかった。この辺には、それでは、ナムアミダブツよりホカになお、ありがたいお話のあるトコロかや。ワシは、ナムアミダブツよりホカにありがたいことは知らぬ』この一言だけで帰国されたとある。ホカに聞くこともないでう。

これは妙好人『信者めぐり』を語つた三田源七老のハナシである。

○

紀さん、私は、この庄松の話の中のナントモナイナントモナイということと、ナムアミダブツよりホカにありがたい話はない

ということが、今から、十四、五年まで、(六十三、四才)までわからなかったのです。紀さんとはじめて知ったころまで。もう一つある。

『信者めぐり』<sup>10</sup> ページに、興正寺派の御法主が庄松同行に『ソチは信をいただいたかや』庄松『へエ、いただきました』法主『その得られた姿を聞かせてくれ』庄松『ナントモナイナントモナイ』法主『それで後生の覚悟は、よいかや』庄松『それはアミダ様に聞いたら早うわかる。オレの仕事じゃなし。オレに聞い

たとて分かるものか』

○

紀さん、私には、「庄松」同行の以上の「ナントモナイ」という二つの御縁がはじめて読んでから、四十年も、わからなかったのです。

○

鐘を打ちつつ「ナントモナイ、ナントモナイ」信心が得られた姿は、「ナントモナイ、ナントモナイ」

○

それから、四十年も経つて、同朋会館の門衛所である時(昭和四十三、四年ごろか)

アア、ソウカ

と、私なりにわからされたのでした。

「ナントモナイ」とは、それは、如来の光明、真実信心に照らされた、私自身の本性、自性の、まったく仏法気の無い、無信のスガタなのでした。我が機のスガタなのでした。

○

そのこと、その後『信者めぐり』を読んでいると、<sup>36</sup><sup>2</sup> ページに、浄教寺師のお言葉として、次の如くあります。

凡夫の性根玉というたら

地獄と聞いても、ナントモナイ。

極楽と聞いても、ナントモナイ。

この「ナントモナイ」トコロへ付ける薬がないゆえに「無有出離之縁」とをうたれたのである。此の「ナントモナイ」機が原因となつて、出来上がりの大法(ナムアミダブツ)ゆえ、ナムアミダブツは、此の(ナントモナイ)機よりホカにオサマリドコロがない御誓約と聞いておくがよい。との浄教寺師のおさとしてである。(続く)